

# 沖縄の根神・その心の軌跡

別府大学文学部人間関係学科

富吉 素子

## はじめに

もう20年も前の話である。1991年初夏のある日、筆者是那覇市の崇元寺跡の近くのバス停である人を待っていた。約束の時間から10～15分もたっただろうか。もんぺ姿の小柄なおばあさんがフラフラしながら近寄ってきた。「とみよしさん？ 大城です」とおばあさんは言った。この人こそ今回の主人公、沖縄の根神大城茂子（以後、敬称略「茂子」と記す）さんだった。茂子はフラフラしながら小高い山の手の方へ私を誘った。

この日に先立って筆者は茂子に連絡をとり、神歌（ミセセルやキューナ）に関して教えを請おうと思っていた。茂子の家は沖縄県国頭郡大宜味村にあった。そこは、沖縄本島の北部地域であり、那覇からは3時間もかかる相当遠い場所であった。茂子は、そのことに配慮し、「自分が那覇に用事があるので、那覇でお会いしましょう」と提案してくださり、今回の運びとなった。茂子がフラフラと歩いていたのは、実は彼女は熱があり、それも結構高い熱らしく、見ても気の毒な感じがした。目的地は息子さんの昔風のアパートであり、玄関を上がってすぐのところに布団が敷いてあり、茂子は靴を脱ぐとすぐにその布団に横たわった。

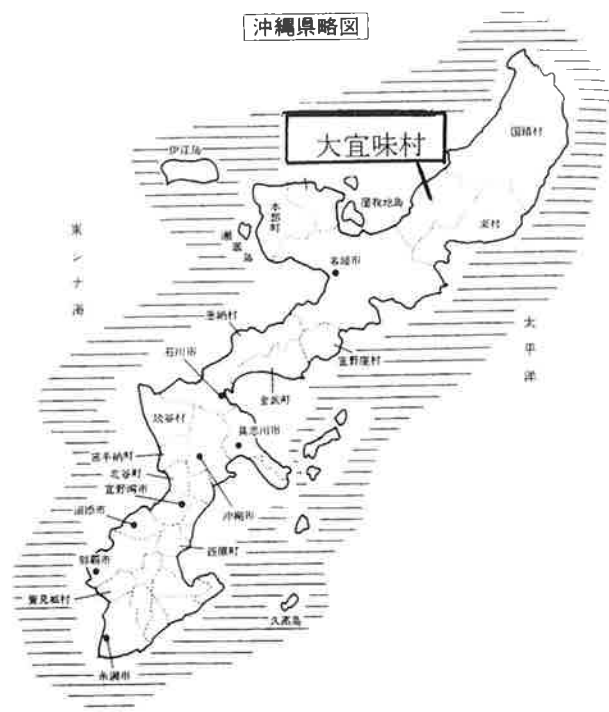
このような病人に、何かを聞き、教えてもらってもいいのだろうかと思いためらいを感じた。しかし、沖縄の滞在日程は短く予定も変更できなかったため、申し訳なく思いながら、聞き取りをすることとなった。

茂子との最初の出会いは、このような変則的なものであった。茂子は、ゆっくり語りながら、ときどき休み、それでも一生懸命床の中から教えて

くれた。

その時から数回、次からは北部の大宜味村まで足を伸ばし、神歌を録音したり、おなり神信仰についての聞き取りをしたり、山の中腹で行われるハンサガの祭りを見学したりした。

沖縄にはニライカナイという言葉があり、これは海のかなたにある極楽浄土をさしている。祖先神たちはそこで暮らしており、祭りの時には子孫達の元へ戻ってきて豊穡をもたらしてくれると信じられてきた。このニライは海の底でこちらとつながっているとも信じられてきた。茂子の子の家の謝名城東方の小高い山の上に大城御嶽がある。この御嶽にある「アブ穴」は海に通じているといわれ、昔子ども達は穴に石を投げ込んで、「コロン」という音聞き、「あー、もう海にいった」などと言っていたと茂子は懐かしそうに語って



国頭郡大宜味村の位置（『沖縄の世間話』p.7より）

た。その後、筆者自身のテーマの変化や仕事の忙しさから、しばらく沖縄北部を訪れることなく過ぎた。2001年の年賀状が届かず、そのことから、茂子の死を知った。

以上、述べてきたエピソード（人のために自分が移動する、熱があってもキャンセルしない、ニライの存在を信じている等）から、茂子の優しさと強さ、屈託のない素直さを感じることが出来る。今回、後述するように宝塚スターすら夢みた茂子の近代性と「根神」という伝統的神役を引き受けた茂子の知性に迫った。

## 1 誕生から根神まで

数回にわたる茂子への聞き取りは、主に民俗学的、宗教的なものであり、個人のライフヒストリーに主眼を置いたものではなかった。ご本人の私的なことはあまりお聞きしていなかった。幸い日本民話の会編の『沖縄の世間話』に概略を知ることができたので、素描を試みたい。

茂子は大正10（1921）年、沖縄県国頭郡大宜味村謝名城に生まれた。父は大城耕光、母はカメといい、4人姉妹の長女として、屋号トゥナイ（大城屋）、別名根神殿内<sup>1</sup>で育った。

茂子は義務教育を終了すると同時に「宝塚歌劇団」への夢をかなえるべく大阪へ渡った。生来、芸能好きであり、歌や踊りに魅せられての渡りで、はじめは「家庭見習い」ということで、あるお宅に下宿した。昭和初期の本土での生活を経験し、標準語を学び、そのお宅の同じ位の年代の「梅ちゃん」と「宝塚」の音楽隊の音楽を見学したりした。下宿した奥さんの厳しいしつけを受け、標準語教育も受け、将来の家庭人としての教養を身につける一方、楽しいことも多い日々であったと思われる。このような若い日々の文化的体験とそれ以前の幼い時の父方祖父による伝承を聞き続けたことが茂子の中で混じり合って、進取の気性に

とんだ女性をつくりあげた<sup>2</sup>。

茂子の家は、代々元屋<sup>3</sup>とともに、根神職を世襲してきた家であった。3代にわたる家付娘になるはずの茂子に祖母は意欲的に「語り部」としての素養を植え付けさせようとしたようである。根神職の家の長女は根神になることを凡そ期待されていた。村の祭祀は年間を通してあり、私生活も侵されるそのような神役になることを茂子は回避したかった。

数年間の大阪での暮らしから、茂子は沖縄に呼び戻された。戦争の足音がかまびすしい頃、茂子は村の青年と郷里で結婚し、一男を儲けた。昭和17年、根神だった祖母が亡くなり、2年後に茂子が根神を継いだ。根神職を継ぐにあたっては、ことがすんなり進んだわけではなかったようである。「人一倍近代文明に憧れていた茂子にとって、村落祭祀を司る根神は時代錯誤の古い人というイメージしかなかった。時代はそのような古いものを否定する方向に流れていた」し、そういう時代であった。しかし、一方で茂子は単に古い祭祀を伝えるだけでなく、もともと祖父の影響により、民俗・民話研究に興味を示していた。根神になりたくなかった茂子の元に、大城真秀（元屋の息子）の紹介で馬淵東一教授（文化人類学）が調査にやって来た。根神になることをいやがる茂子に真淵が言った。「一緒に研究しましょう。それならいいでしょう」と。その一言に茂子は根神になることを決意する。馬淵の「研究」という言葉に茂子は、新しい時代の神人をイメージし、神役や祖先祭祀は古いという自分自身の先入観から脱皮することができた。茂子は根神とともに、知的好奇心を満たしてくれるインフォーマントをつとめることとなった。「何をやっても、結局、私は根神の仕事に引き戻されるんだよ」といったという<sup>5</sup>。こうして根神と研究者達へのインフォーマントの生活が始まった。

<sup>1</sup> 根神殿内の「根神」は沖縄における祖先信仰の中心をなす女性神役で、村落の祭祀を司る。父系血族集団の女性が従事し、殿内はその根神の屋敷をさす。

<sup>2</sup> 『沖縄の世間話』 p.215

<sup>3</sup> 親族組織の宗家（本家）

<sup>4</sup> 同書、p.216

<sup>5</sup> 同書、p.216

## 2 不思議な体験・不思議な話

沖縄には夢の中に現れる神のお告げや、事件や事故を予知する能力の話、日常生活の中で科学的にはありえない理解できない話などが山とある。ここでは、茂子自身の体験からいくつかを取り上げてみたい。

一つ目は、茂子が7歳のときであった。夜、父母と共に、ランプをつけた部屋で寝ている時、10時頃、ふと目が覚めると、白い装束を着た洗い髪姿の女の人が茂子を抱きかかえるようにしていた<sup>6</sup>。その話を茂子から聞いた祖母は、神様が茂子を次の根神に選んだということを実感したそうである。

二つ目は「梅ちゃん」の話である。「梅ちゃん」は茂子が大阪で下宿していたときの下宿先の娘で、仲のいい友達でもあった。長じて結婚した相手が沖縄に転勤になり、沖縄に帰っていた茂子とは再び仲のいい友人関係であった。妊娠4ヶ月の梅ちゃんは、当時戦争中であったが、お正月を大阪で過ごしたいと、疎開船に乗って帰って行った。その夜、船は敵軍から撃沈され、梅ちゃんは身重のまま亡くなってしまった。その同じ時刻と思われるときに茂子は夢をみた。茂子が寝ていると、梅ちゃんが；

ここは太平洋の 真ん中でえー

と、歌いながら〈片手を腰に当てて、片手を前に差し伸べて、交互に〉して踊っていた、という。それは宝塚を二人して夢みたラインダンスのひとコマではなかったか。梅ちゃんが夢で知らせたのかなあと思ったそうだが、こういうことをいうと人に笑われるのではないかと思ひ、年をとるまで言わなかったそうである。茂子の感受性の強さがそのことを感知させたのではないかと、編集者の新城真恵はいう。

三つ目は、祖母の49日を過ぎた夜の10時頃のこ

とである。ランプをつけて布団の中にいるとウムイ<sup>7</sup>が聞こえてくる。まぶたが閉められて、体の自由がきかなくなり、拝所<sup>8</sup>にいるような気分で、ぐったりとなっていると、鉦の音が聞こえ「ウフィーナーナー、ユーヤヒカラツオーティヤ、アトオネーラン」（こんなに世を光らせておいて、後継者はいないのかね）という声が聞こえてきたという。動けないでいると祖母が現れ、「この子はまだ何も知らないのです。赦してください」と祈り、祈りが終わると、茂子の目がパッチリと開き、元のランプの部屋にいたという。この話も話すと、頭がおかしいと思われるのではないかと思ひ、長い間誰にも話さなかったという<sup>9</sup>。神秘的な体験である。

四つ目は、筆者が茂子から直接聞いた不思議な話である。あるとき、川の工事が行われた。工事に先立って茂子が呼ばれ、川の神様に祈る神事が行われた。

神事が終わると、一人の工事関係者が茂子のところに来て聞いた。「自分は神や仏を信じる者ではないが、先日、別の川の工事をした時に、あまりに形のいい大きな石があったので、ユンボーで掘り起こし、家に持って帰ったのです。その日から、目の中で魚のうろこがはねるような感じが続き、気持ちが悪かったので、妻にその話をすると、あなたは工事のとき、川の神様に祈り、許しを得なかったでしょう。石は魚たちの依代<sup>10</sup>であり、そこを棲家としているのだから、勝手に持って行かれて、魚が怒っているのです。早く、返してらっしゃい、と言われた。男性は帰宅後、石を元の場所に戻し、赦しを願った。すると、魚のうろこがはねるような感じがなくなり元に戻った、という。そして、「そんなことがあるのでしょうか」と茂子に聞いたという。茂子はその通りですと言って、その工事の男性を諭したという。神や仏を信じないこの男性がどのように自分を納得させたのか、させなかったのか、今はわからない。ま

<sup>6</sup> 同書、p.216

<sup>7</sup> 神歌の1種

<sup>8</sup> 宗家の屋敷内、または、村落の数箇所にある祭祀や祈る場所

<sup>9</sup> 同書、p.217～218

<sup>10</sup> 依代、神霊が招き寄せられて乗り移るもの。樹木・岩石・人形などの有体物で、これを神霊の代わりとして祭る。

た、茂子自身が当初、根神は「時代錯誤の古い人」と言っていたにもかかわらず、この1件にみられるように、「不思議な」現象に許容的になったのに、どのような経過があったのか、興味があるところであるが、今はわからない。

### ③ ハンサガの儀礼

「ハンサガ」とは、「神降」のことである。ハンサガ=HANSAGAのはじめの「H」は、沖縄では時折、「K」から転じて発音される。つまり、HANSAGAはKANSAGAから転じて発音されたものである。KANSAGA=カンサガは漢字で書けば、神下がり=神降りであり、神降りは「ハンサガ」と発音されている。村の中で新しく神人となるには、神棚のある本家の神に祈りを捧げてから、ノ口殿内の神々に<sup>ウスリ</sup>恐りの祈願をする。この儀式はそんなに頻繁にあるものではないが、筆者はこの儀式のおそらく初めから終わりまでを見学できた。この年は丁度研究者や学術資料館関係者が取材に殺到していた年でもあったが、筆者もその中に混じり、儀式の流れや意味を理解すべく移動した。川での禊に始まり、山でのハンサガ、翌日の<sup>ウツガミサイ</sup>海神祭、塩屋のハーリー競争などである。このように、ハンサガは独立して一つの儀式があるわけではなく、そのいわば、準備、本番、後続の祭りで構成されていたが、今回は、紙幅の関係でハンサガ時の神歌に限り、紹介したい。

茂子が祭祀の保存のために執筆した原稿によると、「ハンサガはアサギ内で昔は夜を徹して行われ、真夜中に神がその人にのりうつると考えられていました。現在は昼中に行い、翌日の海神祭には神人として出席」することになっている。

アサギは「神アシャギ」ともいい、沖縄大百科事典によると「村々において神を招請して祭祀を」行う場所とある。本来建物の有無とは関係ないが、そこに建てられた祭祀用建物も〈神アシャギ〉と呼ばれるようになった。『琉球国由来記』には〈神アシアゲ〉と記され、現在沖縄本島では神アサギ、神サギ奄美大島では神アシャゲと称される、とあり以前は、茅で屋根を葺いた簡素なものであったが、現在は木造のものや、コンクリー

ト製のものもある。

また、ハーリーは同事典によると、「旧暦5月4日」に行われる競漕行事であり、ハーリーは〈爬竜〉の中国音で竜のことである。競漕に用いる船は舳先に竜頭、艫に竜尾の彫りものを飾っている。ハーリーの伝来については、14世紀の閩人三十六姓による招來說や『琉球国由来記』…には、長浜大夫という人が中国南京の爬竜船を模倣して造り、太平を祝すために那覇港で競漕したという俗説が伝えられている。

写真は塩屋のハーリー競漕のものであるが、右手と左手から戻ってきた船を腰まで海に浸かった女性群が太鼓を叩き、唄を謡って迎えるのが印象的であった。写真は海から上がった後のもの。



ハンサガ  
神降の翌日行われた塩屋のハーリーの一こま



ハンサガ  
神降の儀式に先立ちノ口殿内で祈祷（中央が茂子）

恐れ分香筋（ノ口殿内であげられる）

まさきあいみせーヌル殿内ぬ御火神、若ヌル火神、御神、ヌル元祖ぬ御前

今日ぬ吉日、勝る日、クガニ日、ナンジャ日、うとういたてい、さびてい、お酒、御花米、果物、しきかざいさ

びいてい、拝まびしる。

クカニマク、城上門ぬ三女砂川安江戌り女生り国元、なしみにからぬ、暗示カキミソーチ、恐りやびいてい、香筋あぎやびいと、うきと、うい、しみそーち、うたびみそーち。

戌りうとし、霊力高さ生りみそーち、城杜ぬ七重アサギ、八尋アサギ、イスダムトゥ、カナダムトゥ、ウブチ御神とうぬ、相性や、神々しちうたびみそーち、肝心んうちちかち、うたびみそーち、神霊力ぬ道ん迷い、しみらしみそーらんぐと、くまびいしみそーち、神々ぬ御情かきてい、うたびみそーち…

解説：尊くすばらしい、ノロ火の神様、若ノロ火の神様、ノロ殿内をお守りの神様、ノロご先祖様、今日の吉日、勝った日の、コガネのような、銀ぢやのような日をとりにたてまして、お酒、花米、果物もお飾りして拝んで居りますのは、城クガニマキョの上門の三女に生まれた、砂川安江さん戌年生まれた処の、神々から暗示を受けまして、恐れをなして、香筋をあげておがみますので、どうぞ、お受け取りくださいませ。

戌年生れの安江さんは、霊力高く生れておりました、城アサギの立派な、ウブチ神との相性は神々でお調べになって下さい。心にもおちつきをとりもどし、神霊力の道に迷うような事もなく、お情で神坐をあたえて下さいますようお願い申し上げます…

上記のお祈りは、茂子が受け継いだ種々の伝承のうちハンサガの祈りの前半部である。この文章は茂子自身が口承で伝授されたものを文字化することを考え、原稿用紙に手書きで書いたものによった。ハンサガの祭りだけでこのように長い



山の中腹アサギにおける<sup>ハンサガ</sup>神降の儀式（後方が茂子）

で、幾多の祭祀時の祈りを暗唱するのは大変だったのではないだろうか。

ほかの祭り、たとえば海神祭のノロの祈りを見学させていただいたが、そのノロも多くの祈りを諳じていた。やはり、選ばれた人が前任者から伝授されるのだと思った。

## おわりに

この文章を書くに当たり、久しぶりに大城茂子さんに関する種々の資料を読んだ。聞き取りをしていた当時は、儀式や神歌に関するものが主で、茂子さん自身のライフヒストリーには関心を持っていなかった。今回、「沖縄のオーバー」の一人としての茂子さんに注目したが、その余りに高い知性と知的好奇心に「オーバー」だけではすまされないものを感じた。しかも、場所は沖縄の北部ヤンバル（山原）と言われる偏狭の地であり、明治初期における祖父の「文明開化」を求める血や祖母の根神としての誇りと責任感が茂子さんに宿っているのを感じた。

1913年創立の宝塚唱歌隊は1919年に宝塚少女歌劇団に改組されたが、そこを夢見てはるばるヤンバルから茂子さんが単身上阪したことは、筆者にとってもっとも鮮烈な印象であった。茂子さんの進取の気性に富んだ側面と古い伝統を受け継ぐに至る側面の葛藤や妥協を資料を追っていくうちに筆者自身も「神や仏を信じる者」ではないが、もし、来世というものがあるとすれば、ぜひ再会してさまざまな話をもう一度聞いてみたいと思った程である。

お断り 茂子さんが亡くなられているため、写真の掲載は実妹様のお許しを頂きました。

突然の御連絡にもかかわらず、掲載をお認め頂きありがとうございました。感謝申し上げます。

参考文献 新城真恵編 『沖縄の世間話』 青弓社 1993年

沖縄大百科事典刊行事務局 『沖縄大百科事典』 沖縄タイムス社 1983年